
リリカルなのは another's

フルフル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは another s

【Nコード】

N9551Y

【作者名】

フルフル

【あらすじ】

実際には描かれなかった、もう一つくらいなののはの物語。

ゝプロローグゝ（前書き）

勢い重視のそのまま感バリバリの小説です。
すごく深いストーリーではありません。

気楽に読める方を基本として執筆します。

ごゆるりと見ていただければ幸いです。

くプロローグく

プロローグ。

そこには深い漆黒の海と淡い紺の夜空があった。
夜の闇を照らすわずかな月の光。
見渡す限りの水面。

そんな静かな夜の空に「2人」の人間がいた。

一人は青い髪のパニーテールに翠色の瞳。
背丈は180ほどの長身の人間。

一人は銀の髪のセミロングに真紅の瞳。
背丈は120ほどの小さな風貌。

2人は同様に白のローブを羽織っていた。
ローブは2人の肩から足元までを隠し、夜の風に揺れている。

「もう帰りませんか？」

青い髪の間が言葉放った。

声の高さからして、女性だ。

「帰らんもん！」

もう一人の銀髪の間もしゃべった。

声は青髪の女性より高く、やはり女性だ。

「まだ帰らん、絶対にすぐ見つけてやるもん！」
最初より大きな声で叫ぶように言った。

「とは言っても……もうカートリッジのストックがありません」

青髪の女性が淡々と言う。

「このまま長居していたら二人とも海に落ちます」

「ええもん！ウチ泳げるから！」

「……私は泳げません……それに……」

青髪の女性は指を「パチっ」と鳴らした。

女性の目の前に手の平サイズの長方形の物体が現れた。

「ここからだ……」

物体はどうやら電子辞書のような物らしく、横から開いて電子画面を指で叩いた。

「陸まで612kmありますが」

「そ、そんなに泳げるわけあらへんやんか！」

「だから、帰りましょう？」

女性は語りかけるように言った。

「……ちえっ……」

少女は残念そうに舌打ちして下をむいた。

青髪の女性と銀髪の少女は顔を一度合わせると、その場から一瞬で消えた。

2人のいた場所には、元の夜空と海があった。

ゝプロローグゝ（後書き）

初めての投稿となります。

皆さんに見て頂くに値するか正直怪しい作品ですが、
気楽に読んでいただけたらと思います。

なるべく滞らないように続けますので。

何卒よろしく願います。

くまたまた大きな問題なの？くbyなのは（前書き）

連作1回目です。

頑張ります。

「またまた大きな問題なの？」byなのは

闇の書事件から3ヶ月・・・

様々な思惑が交錯した悲劇の事件も終わり・・・

関わっていた人間も、今は平穏を手に入れていた。

・・・高町なのはの場合・・・

平凡な小学三年生兼ミッドチルダ式魔導師である高町なのはの朝は早い。

4：30起床。

5：00桜台・登山道。

朝は野外で魔法練習。

朝食の時間まで、約2時間のトレーニングをこなしている。

そして家に帰り家族と朝食。

両親・兄・姉の4人の家族には魔法については全て秘密。

だが不自由はない。

普通の小学生である。

「じゃ、いつてきまーすっ！」

今日も元気に登校する。

学校でもなのは普通の小学生。

魔導師の必須スキル「マルチタスク」により複数のことを一度に思考可能。

授業を聞きつつも、戦闘シュミレーションをこなしている。

家族や友達との交流の時は休憩しているが、暇さえあれば訓練訓練。

家の手伝いの無い日は夕方まで魔法練習。

「なのは、結界OKだよ」

友人兼ペット兼魔法の師匠の「ユーノ・スクライア」がなのはに伝える。

魔法防護服・バリアジャケットを装備して、上空で実践訓練。

砲撃の実射トレーニングは体力を消耗するが、それもかかさない。

「デイベイン・・・バスターッ！」

なのはの直射砲撃魔法「デイベインバスター」である。

夕食を取り、夜間にまでも訓練訓練。

夜間は高速移動& a m p・高速起動訓練。

ぐつたりになるまで訓練を続ける。

8：30 入浴。

その後すぐ就寝。

これが魔導師兼小学生である高町なのはの日課である。

そして……………

「ねえねえ。ユーノ君」

「なに？なのは」

「スターライトブレイカーの発射シークエンスを少しだけ変えてみたんだけど、試射してもいいかな？」

「うん、いいよ！でもブレイカーは目立つから強い結界しておくね」

スターライトブレイカーとはなのは最大最強の放射系攻撃魔法である。

「どんなふうに変えてみたの？」

「うん、ブレイカーはタメが大きいから高速戦だと使えないから……」

「タメを縮小して起動速度を高速化したの？」

「うっん！逆だよ！チャージタイムを増やして威力を大幅に上げるの」

・・・

ただでさえ威力A+のブレイカーをさらに強化。
未恐ろしくもある。

「そ、そう・・・」

ユーノも少し引いている。

「準備いーよ、なのは」

結界の準備を終えたユーノがなのはに言った。

「うん！」

「スターライトブレイカー・スタンバイ・レディ」

なのはのデバイス「レイジングハート」がカウントを始める。

10・9・8・・・

へなのは大丈夫かな・・・

ユーノは少し心配そうだった。

7・6・5・4・・・

「これが成功したら、フェイトちゃんに勝てる！」

なのははかなり有頂天だった。

3・・・2・・・1・・・

「ユーノ君、衝撃に備えてねっ！」

「わかった！」

0・・・・・・

「スターライトお・・・ブレイカーアーーー！」

結果。

ユーノが用意した結界は見事に内部から碎け散り。
威力を発揮した。

魔力喪失により全治1日。

「うう・・・失敗した・・・」

「でも、威力は上がったよねえ？」

「うん、それは間違いないかな・・・」

高町なのは。

彼女は今日も、昨日より成長している。

くまたまた大きな問題なの？くbyなのは（後書き）

不自然極まりない小説ですいません。

おそらく読者の10割が不快感を抱くと思いますが・・・

こらえていただけると幸いです。

「アルフ、あれやってみようよ」「b y f e i t (前書き)

お願いします。

「アルフ、あれやってみようよ」byフェイト

〃フェイト・T・ハラオウンの場合〃

「ハーケン・・・セイバーっ!」

いきなりのフェイトの必殺技「ハーケンセイバー」である。

ここは名もなき砂漠。

今はフェイトとその使い魔アルフの戦闘訓練の場所と化している。

「甘いよっ!」

アルフはハーケンセイバーを素早くかわし、フェイトに急接近する。

「・・・ちゃんと読んでたよ」

ハーケンセイバーをかわし、フェイトに掴み掛ろうとしていたアルフに雷の槍が襲いかかった

「プラズマランサー!? いつの間に!」

「アルフがセイバーをかわして、一瞬私から視線を外したとき」

自分から突っ込んでいったアルフは勢いを止めきれない。

そのままプラズマランサーの餌食に・・・

「使い魔の勘は伊達じゃないよ！」

なんとほぼ野生の勘でプラズマランサーをほとんどかわしきった。

「かはっ・・・」

だが数発は避けきれずに直撃してしまった。

「大丈夫？アルフ・・・」

イヤミではない、フェイトは本当にアルフの身を案じているのだ。

「全然、ピンピンしてるよ」

アルフはプラズマランサーを喰らいつつもヒョイっと起き上がった。

「それでこそ私の使い魔」

「それでこそ私のご主人様」

二人はお互いを見据えつつ、足に力を込めた。

「そろそろ終わらせるよ」

「アタシも疲れてきたからそろそろだねエ」

「バルディッシュ！」

「イエス・サー」

フェイトのデバイス「バルディッシュ」が答える。

「サンダー……ブレイドっ！」

「フェイト……強くなったね……」

アルフはそんなことを考えながらサンダーブレイドを受けきった。

そしてフェイトの目の前まで接近した。

「嘘……」

少し驚いているフェイト。

「今日はアタシの勝ちだね」

寸止めでフェイトの鳩尾に拳を突き立てているアルフが言った。

「やっぱりアルフは強いよ」

戦闘訓練を終え、アルフに話すフェイト。

「なぐに言ってるの、ソニック使わないフェイト相手でやっと互角だよ」

少し笑いながら言い返すアルフ。

「それでも、私と対等に渡り合うだけでも、アルフは強いよ」

空を見上げながら言う。

「そりゃアタシはフェイトの使い魔だからねえ、フェイトを守り、助けるのがアタシの仕事だし」

「フェイトに負けなくらいの実力じゃないと、フェイトを守れないからね」

「・・・守ってくれるの？」

アルフの目を見て、フェイトは言った。

「あ、当たり前だよ。フェイトは・・・アタシの大事なご主人様だからね」

照れくさそうに頭をかきながら、アルフは答えた。

「じゃあ、私もアルフを守るよ」

「え？」

聞き返すようにアルフは言った。

「アルフも私にとって、大切な人だから」

アルフは穏やかな表情で・・・

「・・・ありがとう、フェイト」

それだけを言った。

「そろそろ帰ろうか？」

「そうだねえ、もうかなり遅いはずだし」

二人が帰ろうとしたときにはもう空が赤く染まり、日は暮れ出していた。

「じゃあ、帰ろうアルフ」

フェイトはそう言ってアルフに背を向け、帰ろうとした。

・・・刹那・・・

「フェイト・テストロッサ、捕捉」

冷たい透き通るような声が響いた。

「申し訳ありませんが、死んでください」

その声は言い終わるより早くフェイトに攻撃を仕掛けていた。

「死ぬ・・・」

フェイトは一瞬そんな事を考えた。

相手の攻撃はまだ視界にも入っていない。

どんな攻撃かもわからない状態では回避しようがない。

振り向くより早く、声の主は手に握り締めた短剣でフェイトの首を狙っていた。

「っ……………」

だが短剣は何者かの手により、フェイトの首の寸前で静止した。

「殺らせるわけ……………ねえだろうがっ！」

アルフの手だ。

短剣を素手で止めたアルフの右手からは血が滴り落ちていた。

「うつらああっ！」

アルフは力の限りを左手に込めて声の主を殴り飛ばした。

声の主は40mほどぶっ飛ばされ、砂漠の砂に埋もれた。

「フェイト！大丈夫！？」

アルフは自分の怪我も意に介さず、フェイトの身を案じた。

「……………大丈夫、ありがとうアルフ」

フェイトは自分の不甲斐なさを痛感していた。

「……ついさっき守ると言っただけなのに」

アルフの血塗れの右手を見てフェイトは言った。

「ごめんね……」

言い終わると同時に続けてフェイトは言った。

「……絶対に許さない」

フェイトはバルディッシュをザンバーフォームに起動させ、臨戦態勢を取った。

その間にぶっ飛ばされた声の主も起き上がりフェイトを見つめていた。

「貴方は何者ですか……？」

怒りを押し込め、フェイトは聞いた。

「私ですか？私は……」

声の主は羽織っていた「白いローブ」を脱ぎ捨て、名乗った。

「私は、レンリクスタ出身、フォース・クロスハント様に使える3騎士が一人」

淡々と声の主は話し始めた。

「ソードのクラスにて仕える、ミルファ・ライオラスと申します」

手に入れた平穩は・・・今また、崩れようとしていた。

「アルフ、あれやってみようよ」「b y f e i t (後書き)

急展開！

いきなりすぎて逆に読みにくいと思いますが引き続きお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9551y/>

リリカルなのは another's

2011年12月1日21時07分発行